

銚子ジオパーク市民の会ニュース



屏風ヶ浦 (銚子市)

第 105 号
2020年2月27日 発行
発行責任者 工藤 忠男
編集責任者 藤身 隆雄
TEL 0479 24 2225
<http://choshi-geopark.com/>

公立鳥取環境大学巡検のジオツアー

小玉 健次郎

2月21日10時50分に、ジオツアーになりました。鳥取環大の柚洞先生に引率された学生約30名と外川駅に集合、3コースに分かれてジオツアーをしました。コース①は愛宕山と外川、コース②は外川と大岩・千騎ヶ岩、コース③は外川と長崎・宝満で、市民の会のガイドが案内をしました。前日、地域交流センターで綿密な打ち合わせをし、地元の人々の暮らしと大地の成り立ちがいかに密接に関連しているか、銚子の大地の特徴、その成り立ちの面白さ、地元の人々が自然の恵みをどのように大切にしているか、などを話そうと意気込んで歩き出しました。

ジオパーク市民の会々員でもある越川奏一さんの、建築士会発表のレポートと解説「銚子ジオ建造士が見た外川のまち」を拝聴し、外川の厳しい環境と現状を考えねばならないと痛感した。銚子の昔ながらの街並み外川は、観光客目線を意識した観光ガイドが主流のように思える。ジオガイドももちろん。

地は、現在の建築基準を満たしていない。そればかりか、敷地より高い位置にある道路が崩れるところもあり、大変危険。ではどうするか。安易に建替えなどを禁止するのは事情が許さない。一般的な解決方法は、道路管理責任者による改修。道路側面を擁壁に改修し、可能な限り現状維持を目指す。しかし現在の銚子市財政状況では最優先事業になるのは無理でしょう。人口減少に伴い空き家率も上がっている。冬の海のようなどんより暗い状況のよう。「もしも改修工事に着手できるならば、改修時に出てくる銚子石を使って、昭和外川村エリアを作りテemapパーク化することもできるな」と、夢を見た。

「カモメのひみつと観察会」に参加して
銚子のカモメの謎―ジオストーリーで語ろう
藤本 京子

漁港で漁船から釣り上げる。○海は親潮、黒潮の混合域、さらに利根川がもたらす栄養塩(窒素、リン酸、ケイ素)は冬季にとりわけ濃厚。豊富な植物プランクトンのお蔭で好漁場となりイワシ、サバを主に漁獲量連続10年日本一で、漁師さんにとってきた魚をカモメさん、失敬している。平田先生のお話ではカモメはとても利口でカラスに劣らない生態を示す。これは私たちが知るジオポイント。これを土台にカモメを語ると単なる風物詩ではなくより重層的にカモメを語れると知った。

つまりカモメは豊かな海の象徴であり、人間活動と密接に関係した生き物なのですね。後半は絶好の好天に恵まれ楽しい観察会でした

開場早々からたくさん質問が飛び出し、よく見てよく考えることが大切という柚洞先生の言葉もあって、熱気あふれる

会場の〇、カフェさんから、地元の食材を使った手造りのご馳走が山のように提供され、若者たちは大喜びでした。いつものことながら会員の皆さんの温かい機敏な対応、おもてなしが光った意義あるイベントでした。

外川は江戸時代初期に崎山治郎右衛門によって、港の整備や碁盤目状の街路の構築に加え、海からの産物の鰯を干鰯にすべく土地利用区分もなされ、現在のような街並みへと進化した。しかし今、進化が止まった。成長期の進化の停滞は乗り越えられるが、厳しい事情もある。これは、どの地方も直面している事例。風情を感じる狭い道路より低い住宅敷

たられば咄し
宗 真理子

空き家率も上がっている。冬の海のようなどんより暗い状況のよう。「もしも改修工事に着手できるならば、改修時に出てくる銚子石を使って、昭和外川村エリアを作りテemapパーク化することもできるな」と、夢を見た。



要約すると
○銚子はユーラシア大陸の東端、太平洋の西の端に位置し世界のカモメの結節点。
○海に突き出たとんがり地形であ